

雛の館－資料1

享保雛（河北町所蔵）



ひな人形の歴史の中で最も豪華で華美の時代はないといわれている。その姿は角張っており、女雛は五衣、唐衣、裳を着け、着地はいづれも金欄や錦を使っている。この雛は本町内の享保雛でも小振の品で50糎位のものである。

古式享保雛（国井髙一家蔵）

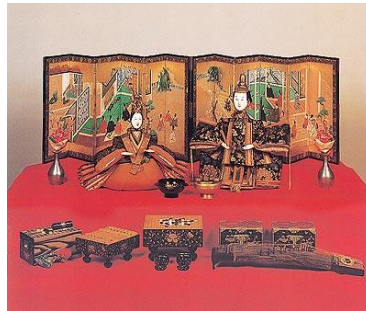


雛が様式化され段上の雛が姿をみせ始めたのは、寛永時代に端を笈したものと思われる。元禄時代に雛道具も加えられ、更に華麗さをもつようになる。

この雛は、元禄雛に非常に近く（女雛の袖口にご注意ください）。豪華さを競った享保雛への移行時期のも

のかと思われる。

享保雛（国井髙一家蔵）



清涼殿の雛屏風を背景にした内裏雛は、小振りであるが享保雛である。本品は約27糎位の男雛。装束の裂地からして享保6年の儉約令による寸法制限の影響を受けたものか。

…銀製の花生けや道具、遊具がその時代を偲ばれる。

古今雛（黒沢浅吉家蔵）



享保雛がしだいに豪華を競うようになり、町奉行は贅沢禁令の御法度を笈し、以後、次郎左エ門座雛が定まれる寸法の範囲で作られる。更にこれに対して古今雛が生まれる。雛商がそれぞれの独自の趣向により、さま

ざまな容姿の雛が誕生、古今雛にも新しい意匠が試み出される。この雛もその一つで江戸後期に近いものであろう。

古今雛（柴田菊生家蔵）



古今雛は明和（1764）のころ江戸の大槌屋か、原舟月に顔を作らせたもので、これがこの時代の原型となる。川柳に「いい細工、顔もてらてら舟の月」と詠まれ、次第に古今雛が流行し明治迄つづく。

古今雛（升川修家蔵）



江戸川柳に「いい細工、顔もてらてら舟の月」と詠まれているように、上野池端の大槌屋が、原舟月に顔を彫らさせ売り出したのが今

雛の館－資料1

から約220余年前（明和時代）の新型の雛で、これを古今雛と称している。

現代雛のルーツとも言われている。

有職雛（国井髙一家蔵）



有職故実（ウリやくぐまいた）に忠実につくられた雛を有職雛と称している。本品は、衣冠姿の有職雛である。衣服とかぶり物をつけた姿を総称して衣冠と言う。男雛の袍の紋様は、飛雲に飛鶴紋で親王の衣紋とされている。女雛は桂袴と称し、女房の常服を着している。男雛の高さは38cmと大振りな有職雛である。

立雛（細谷巖家蔵）



初歩的な人形は紙雛で、白紙の雛を色紙で作るようになり、更に思い思いに紙

雛に装飾を加えたり胡粉の置上げと豪華になっていった。本品は縮緬の生地に松と藤花を糸で刺繍したものである。男雛は烏帽子でなく冠であったが巾子（髪上げを納める筒）が欠落している。なお双方とも木製の頭である。

三人官女（林重見家蔵）



明治中期以降になると段飾のセットものが出始める。その一つの三人官女で一品作品のものである。約23cmの官女で綾織白三重襷の小袖に、塩瀬羽二重のねじまち袴を着す。中央の座している官女は妻帯者で留袖、顔は典型的な古代の日本美人を現している。

五人ばやし（河北町所蔵）



右からいうと、地謡・笛・小鼓・大鼓・太鼓の順である。

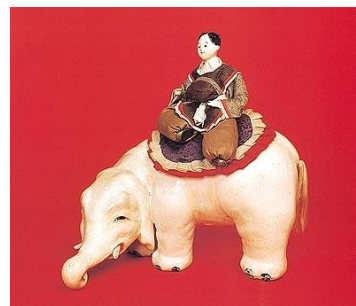
衣装は小袖が紅縮緬に金糸縫取りに金欄の袴を着し侍烏帽子を頭上に冠している江戸後期の作品かと思われる。顔の表情は、それぞれ異なりお囃しの雰囲気が出てくる。

隨身（浅黄勘七家蔵）



隨身とは、平安の昔、近衛の舎人のことである。この隨身は、牡丹唐草の袍を付け、顔の表情は極めて威厳に満ちている。江戸後期の作かと思われる。

衣裳人形 [稚児文殊]（鈴木玲子家蔵）



文殊菩薩は象の上に乗っ

雛の館－資料1

ている佛像が多く、それにヒントをえて、張の象に可愛らしい稚児を乗せている。この手を稚児文殊と称した衣装人形である。子たちの学業成就を願ったものであろう。

舞姫（柴田菊生家蔵）



寛政（1790）頃に親王雛の外に常雛として多くの雛人形が世に出るようになる。この人形は古今雛の女雛を立たせ舞姫に仕立てたものである。衣装はまったく古今雛と同様にしつらえている。

本品は弘化二年（1846）に求め、玉津嶋姫明神の箱書となっている。

牛車（榎 常司家蔵）



雛壇の添え人形として、

緋毛氈に姿を見せるようになるのが、江戸中期といわれる。

この牛車は、大正期のものと思われ、太刀浅沓を持つ童子は水干を着し、使丁は、牛を引く者、台傘、立傘を持つ者は白丁を着しており、王朝の雰囲気漂ってくる華麗なものである。

御殿飾り（和田多聞家蔵）



雛段の源氏框や紫宸殿は江戸時代から京阪地方で流行している。

この御殿飾りは標準的な造りでそこに飾られるひなは、古今雛の容姿の内裏雛を中心に、雛人形が配置されている。特に明治後半にきめこまかに考案されたといわれている。

古今雛（河北町所蔵）



古今雛で、面長な顔、非常に整った装束、都の御所文化への憧れが色濃く示されている。男雛の装束は実に写実的な束帯姿、女雛の宝冠や十二単は、古今雛特有の精巧な仕上げをしている。面立は気品に満ち、均衡のとれた容姿は一層の優雅さを感じる。

享保雛（細谷巖家蔵）



京文化との交流のあかしでもあるひなの一つで、親しみのある表情とともに、ひなまつりを訪れる人々のところをなごませしてくれる雛である。保存もよく、京雛の美しさをいつまでも伝え

雛の館－資料1

てくれる享保雛の逸品である。

有職雛（河北町所蔵）



公家の衣紋様式を写實的に忠実に作られた雛を総称して有職雛という。

この雛は、その中の狩衣雛と呼び、男雛は、30cmで竹葉地文に上紋浮線綾、袴は古代紫地に八藤紋浮織。女雛は、23cmで地文亀甲に花紋浮織を着し気品に満ちている。箱書に元治元年3月（1864）と記れており幕末の作品である。

立雛（国井髙一家蔵）



雛は、まず紙雛が登場する。男雛は袖を左右に張り、女雛は円筒形で熨斗形の立ち姿である。後世において室町風俗を模した衣装を着

ており裂製のものが作られてくる。この立雛は、天保12辛丑年（1841）の箱書がある。男雛は、緋菱綾地に枝垂桜と松の刺繍40cmの高さ。女雛も共衣裳の熨斗形で29cm高さである。

竹田人形（竹谷義一家蔵）



衣裳人形の一つで、大阪竹田の人形芝居をモデルに作られたところから竹田人形と名づけられている。衣裳は一枚仕立てに縫ったものを重ね着し、芝居の姿を再現させたものである。動と静を巧みに表現されて、当時の芝居好みの人々に大流行した衣裳人形、即ち竹田人形の一つである。台座にもその特徴が見られる。

次郎左衛門雛（工藤亮輔家蔵）



「引目鉤鼻」の典雅な気品に満ち、王朝文化風の造型をとりいれている。作者次郎左衛門は、宝暦11年（1764）に江戸に下り以後30年間次郎左衛門雛は、享保雛に変わって人気を集め広く親しまれている。装束は、有職故実に基づいて仕立てられている。

三人官女（鈴木玲子家蔵）



当家には、享保びな一対が所蔵されているところから、明治の初めにこの雛にあわせて五人囃子、隨身、使丁と共に京都の雛師に作らせたと伝えている。この三人官女も、大きな享保雛と調和し、16尺の天上の和

雛の館－資料1

室にマッチした豪華な壇飾となりその中で上品な三人官女の姿が印象的である。

五人囃子（雅楽）（細谷大作家蔵）



古今雛（1764～）が、新たに世に出たのが十代将軍家治の時。しだいに古今雛が定着した頃に、添え雛として登壇したのが五人囃子である。この五人囃子是有職故実にもとづいたところから、有職五人囃子地と呼んでも過言でないと思われる。

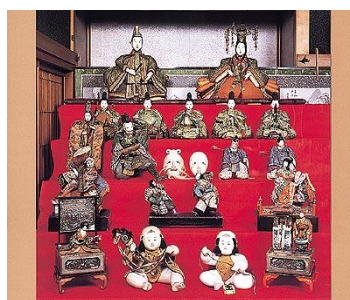
享保雛（安部十一郎家蔵）



1716年に享保に改元、江戸中期で8代将軍吉宗の時代で生活的に安定し文化的にも発達した時でもある。このときに雛も一段と

花開き、豪華絢爛を競いこのでの雛が誕生したのである。装束は金欄地で装い、目は切り目で面長く、公達を思わせる気品をうかがうことができる。

享保雛と段飾り（細谷巖家蔵）



細谷家の段飾りの一部があります、上段は享保雛（1715～）である。以下順に説明すると、有職雅楽の五人囃子、五月人形の神功皇后と武内宿祢、尉婆の面、隨身四段目は「国性爺合戦」外の竹田人形。五段目は機巧人形の「三味を引く女」、「宝運び」、中央が「駒を持つ」、「赤ひもを持つ」御所人形で水引手の頭となっている。

三人官女（河北町所蔵）



内裏雛の添えびなとして、五人囃子とともに三人官女が雛壇に登壇するのは、江戸後期からといわれている。本品は、明治初期のものか、それぞれの面は個性豊かに作られ、思わず笑いを誘う雰囲気をもっている。

隨身（榎常司家蔵）



江戸後期には、段飾りの様式がにぎやかになってくる。内裏雛を中心に、三人官女、五人囃子、そして隨身がくわわってくる。それに従来の調度品が飾られる。この隨身も江戸後期の品と思われる。（高さ28.5cm）

雛の館－資料1

親王雛（升川剛男家蔵）



この雛は、古今雛に類するものであるが男雛は、雲立桶に鳳凰丸紋の有職雛で、女雛は、典型的な古今雛である。宝冠も古今雛の特徴を表し豪華である。有職雛と古今雛のセットから親王雛の呼称が相応しい。江戸後期の作と推測される。

次郎左衛門立雛（河北町所蔵）



京都の人形師雛屋次郎左衛門の立雛である。丸顔に引目鉤鼻、おちょぼ口が特徴。衣装は金襴地を和紙に張り、男雛は両袖は左右に張り、女雛は袖と身ごろがいっしょになっており、帯が巻いている状態がつつましやかに見せている。（男雛

32cm、女雛21cm）後世、江戸に招聘され座雛を考案し、武家社会のお雛として風靡することになる。

御所人形（細谷大作家蔵）



御所人形も初めは粘土製の人形に胡粉をぬったものであった。その後、木彫の木地に、更に練物（桐のおが屑）に胡粉を重ね塗りし磨きだし、艶やかな白肉肌仕上げたものである。しかも、人形の美しさを極限に追求した芸術性の高いものである。この人形は、水引手で凛凛しい面だちに、駒を持つ両腕に力がみなぎっている容姿は、男子の逞しさを感じさせる。

古今雛（榎正敏家蔵）



古今雛は日本橋人形町の

原舟月が考案した江戸雛を代表するものの一つである。本品は江戸中期のものと思われる。装束は色彩豊かにして、享保雛と比較すると極めて写実的である。

次郎左衛門雛（國井髙一家蔵）



京都の人形師、岡田次郎左衛門が幕府の御用となったのが宝暦時代といわれる。その次郎左衛門が創案したのが、この手の座雛である。従って武家（諸大名）に流行したもの。有職に近く、顔が丸く、引目、鉤鼻に特徴があり、気品に満ちた面立ちをしている。男雛47糎、女雛は37糎と大振りである。